イベント名	特別企画　伊藤雄馬さん「「教える」も「育てる」もない森の民に言語教育とは何かを伝えようとしてみたら大変だった話」		
実施委員会	企画委員会	開催場所	オンライン
開催日時	2024/8/4 20：00～22：00	参加人数	65 名
参加資格	会員・非会員	参加費	無料

イベント概要

今回の特別企画では、『ムラブリ　文字も暦も持たない狩猟採集民から言語学者が教わったこと』、『人類学者と言語学者が森に入って考えたこと』で知られる言語学者伊藤雄馬さんにお話しいただきます。ムラブリの人たちの生活を通して見たたとき、世界は、ことばは、どのように見えるのでしょうか。教育や研究という営みはどのようなものとして捉えることができるのでしょうか。このことについて考えることを通して、近代社会において自明視されている学習や教育という概念についてもう一度考えてみたいと思います。

【伊藤雄馬さんからのメッセージ】

言語教育ってなんでしょうね？もっというと、教育ってなんなんでしょうか。あ、こんにちは、伊藤雄馬と申します。ムラブリという森の民の言葉を学んで 15 年くらいになります。ムラブリ語は 500 名くらい話者がいて、そのうちなくなりそうな危機言語です。危機？やっぱり言語がなくなるのは、危機なんでしょうかね。

ところで、ムラブリ語には「教える」に相当する本来語がありません。借用語に使役接頭辞という、かなり大袈裟な言い方をします。また、「育つ」はあるけど、「育てる」は言いません。文法的には可能なのに、です。調査中に「育てる？どういうこと？」と聞き返されて、ぼくは何も答えられませんでした。

「教える」も「育てる」もないムラブリに、言語研究や言語教育の意義を、どう伝えればよかったのでしょう。みなさんのお知恵をお貸しください。（伊藤雄馬）

※本企画は、7/27 衞藤智子さん、板橋民子さん、吉田真宏さん「Learning by Doing ―ランゲージ・フェスティバルの実践」とのコラボ企画として実施しました。

（担当委員：大平幸　古屋憲章　中山由佳　金桂英）

活動報告

「19XX 年、フランス領インドシナ森林内にて狩猟採集民ムラブリ人に転生したあなた。森林伐採とゲリラ活動の激化で森林の資源は枯渇、仲間は半ば飢餓状態。仲間全員と一緒に保護を受けるため、仲間に『教育とは何か』を説明し納得させることがあなたのミッション。さあ、あなたならどのように仲間を説得する？」

これは、本企画の冒頭で伊藤さんから与えられたワークのお題です。

ムラブリの人たちに「教育とは何か」をどのように説明するかを考えるというこのワークによって、私たちはいきなりムラブリの世界に放り込まれ、ムラブリの人々の生活やことばを想像しつつ、持てるリソースを駆使してなんとか「教育」の説明を試みるという体験をすることになりました。ちなみに森林伐採とゲリラ活動の激化によってムラブリの人たちが生活に窮するという状況は、ベトナム戦争時に実際にあった史実に基づいたものなのだそうです。

【当日の流れ】
■活動１：ワーク「転生したらムラブリだった件」
　　あなたならムラブリの仲間に、『教育とは何か』をどう説明する？
■活動２：ワーク「「教育」の対義語を考える」
■全体シェア
■伊藤雄馬先生のトークタイム
■全体ディスカッション

ワークを通して浮かび上がってきたことは、参加者である私たち（多くは言語や言語教育関係者でした）が、無意識のうちに教育をよいものとして捉えているのではないかということでした。さらに言えば、そこには、教育を受けるべき人にはなんらかの不足点があり、相手を変化させなければならないという考えがあるのではないかということでした。

伊藤さんは、「教育」の対義語は「即興」だと言います（当日はそう思ったということなので、今もそうかどうかはわかりません。なにせ「即興」ですから）。なぜ、そう思ったのか伊藤さんは、明確には語りませんでした。でも、「即興」の対義語が、「予測」「計画」「準備」といったことばであることを考えると、おおよそ現在の教育がそのようなものになっているのではないかということに思いいたります。では、その「即興性」というのは、どういうことなのか。そのヒントになるのではないかと思う伊藤さんのことばを以下に引用します。

> ただ、僕が僕としてあるということによって、何か皆さんに気づきが生まれたり、驚きだったり、何かしらの感情が巻き起こるのであれば、それを教育と呼んでもいいんじゃないでしょうか。ある種の教育というものが、前提とするあなたは不足ですという部分を放棄して、あなたはもうそのままで十分、十分ですっていうことを言いつつ、一緒にいることができるかっていうことを、いろんな場所でチャレンジしているんです。

このことばは、ムラブリであること、言語研究者であること、一人の人間であることがどのようなことであるかを常に自らに問い続ける伊藤さん自身をよく表すことばである

と同時に、参加者の私たちにも、教育者であることと一人の人間であることがどのようなことかを問いかけることばともなりました。

今回の特別企画は、企画の流れから、活動の内容も含めて、伊藤さんが考えてくだったものです。こういった企画は、講演者の講演があって、その後にグループディスカッションという流れが一般的なので、今回はその定石を大きく反転させるものだったと思います。しかし、参加者の方からは、最初に「転生したらムラブリだった件」の活動があって、最後のトークがあって、その全体が流れとしてあったらからこそ、成立した企画だったというコメントをいただきました。私たち担当委員もそう思います。企画の全てを計画してくださった伊藤さん、コラボ企画の企画・運営をしてくださったランゲージ・フェスティバルの衛藤さん、板橋さん、吉田さん、ご参加くださったみなさまにあらためて感謝いたします。

担当委員：大平幸　古屋憲章　中山由佳　金桂英